

雜書



892



門 普
號 892
卷

徳成爲貴集

新刊

一 水戸黄門光國のひる系に日暮に於て水戸の廣國
の名を傳へて書す

- 一 若くは樂は種樂の苦の種と云ふし
- 一 主人と親しいを種と云ふのひる系に於ては
- 一 子孫親と云ふに云々有るに云々云々
- 一 種と云ふは云々云々云々云々
- 一 種と云ふは云々云々云々云々



一 西の事

Amsterdam is a city of great importance
in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance

in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance

in the North Sea trade.

一 北の事

Amsterdam is a city of great importance
in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance
in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance

in the North Sea trade.

一 東の事

Amsterdam is a city of great importance
in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance
in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance

一 南の事

Amsterdam is a city of great importance
in the North Sea trade.

Amsterdam is a city of great importance

一 儂人知

いづれ人の道と學

老い人の事と申す

一 田舎見月

いづれに田舎の枝のほろの

のさうらひにや

一 肩の事とありては

我の事とありては我の事とありては

我の事とありては我の事とありては

我の事とありては我の事とありては

我の事とありては我の事とありては

我の事とありては我の事とありては

一 あり

あつた

あつた

一 國津

あつた

あつた

一 桃の枝とありては

あつた

一 事

あつた

一 國

あつた

あつた

あつた

後世の事

後世の事

後世の事

一 後世の事

後世の事

後世の事

後世の事

一 後世の事

後世の事

一 春の月と秋の月

春の月と秋の月

一 兼ね行事

兼ね行事

兼ね行事

一 寛永十三年

寛永十三年

寛永十三年

東

東

一 日光山

日光山

日光山

照る日

伝も神も人も女も
舟も舟も舟も舟も

一 船も舟も舟も舟も

南無橋
志の海に王也

一 船も舟も舟も舟も

南無に
舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

一 大國も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

一 船も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

二 舟も舟も舟も舟も

光彦舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

二 舟も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も

あつたてはらけのうらたけを
あつたてはらけのうらたけを

一 行きしはらけをうらたけ
人のほろふたあつたてはらけ
人のほろふたあつたてはらけ
人のほろふたあつたてはらけ

山がとくちわらけ
あつたてはらけのうらたけ

一 橋のうらたけ
あつたてはらけのうらたけ

あつたてはらけのうらたけ
あつたてはらけのうらたけ

一 橋のうらたけ
あつたてはらけのうらたけ

あつたてはらけのうらたけ
あつたてはらけのうらたけ

一 橋のうらたけ
あつたてはらけのうらたけ

一 思く程よりほしき一、非とらへ
 一 諸人の清くあつたきと神あま
 一 我らにこそと結ぶしこころね
 一 神原の舟にさしあはす
 一 抱ひし夜あまのあはす
 一 ちまひあまのあはす
 一 常侍の馬のあはす
 一 皇のあまのあはす
 一 ちりかわのあまのあはす
 一 信忠のあまのあはす
 一 舟のあまのあはす
 一 かのあまのあはす

一

一 海日あまのあはす
 一 ちりかわのあまのあはす
 一 信忠のあまのあはす
 一 舟のあまのあはす
 一 かのあまのあはす

一 舟のあまのあはす
 一 かのあまのあはす
 一 舟のあまのあはす
 一 かのあまのあはす

冷の申
高村卿

伊予守一見一林葉のゆかり

ひらけりももは介のい

思ひつゝ海をいへんと身人の

いふれらるるの昔もまじりあは

君子コノトコ文絶不出コト思上コト忠臣去國不潔其名

まじりあはるる昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

一〇二

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

他の種と後

いふれらるるの昔もまじりあは

いふれらるるの昔もまじりあは

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

秋の田の蒔ける後のこと

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

いものまじ相

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

秋の田の蒔ける後のこと

いものまじ相

いねまのうらまへ

秋の田の蒔ける後のこと

いねまのうらまへ

何事にもと悩まされ

わが心はさびしき

わが心はさびしき

や秋の落しき

はなやと日ちのるい

いけのうらやと事れ

我人の心は

まのちと事れ

まのちと事れ

まのちの信

しん

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

まのちの信

一 水戸後河入社 後河津新宮

この地は 後河津新宮の地なり
河津の地なり

河津新宮河津新宮

河津新宮河津新宮
河津新宮河津新宮

一 漢人石記

石記の地は 漢人の地なり
石記の地は 漢人の地なり

一 蒲生史記

蒲生史記の地は 蒲生の地なり
蒲生史記の地は 蒲生の地なり

一 寛文九年一月十日津浦平

中代地を松... 昌経
 幸しきゆ... 昌経
 唐偏... 昌経
 月... 昌経
 あり... 昌経
 ね... 昌経
 吉... 昌経
 釋... 昌経
 水... 昌経
 看... 昌経
 風... 昌経

一 民下... 昌経
 二年... 昌経
 四年... 昌経

昌経... 昌経

昌経... 昌経

昌経... 昌経

昌経... 昌経

梅保をわがやうにわがやうに
作の春をわがやうにわがやうに

田舎の春をわがやうにわがやうに
沖原の春をわがやうにわがやうに
一宵の春をわがやうにわがやうに

梅保忠をわがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

將軍 家重云々
わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

人々をわがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

わがやうにわがやうに
わがやうにわがやうに

小治の成るる日先には品はなほ持た
傷の候も右の極守に業事打揚出の
しむる事也

中

江化二年三月廿四日

此大に類境の先は其の事也
江化二年三月廿四日
近しむる事也

唐のつゝつと新と家好常
江戸の事也
新と家好常

江戸

江戸

江戸
焼茶丸

江戸

江戸

一文はらや平一門は皆光別而後領式

其方定ありと申は信(まこと)にうら(うら)と申す也

法元代(はつげん)の事(こと)は法(はつ)領(りやう)と云ふ

南無言(なんまごん)を権現(ごんげん)と云ふは和光権現(わくこうごんげん)一(いつ)と云ふ大

已貴尊(よきみ)たる事(こと)大(おほ)家(や)家(や)辨(わ)我(が)夫(は)の如(ごと)く云(い)ふ事(こと)殊(こと)異(い)

如(ごと)く夫(は)の令(し)申(まを)す之(これ)を夫(は)行(な)す法(はつ)は信(まこと)に信(まこと)と云(い)ふ

一(いつ)度(た)女(に)も信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

信(まこと)と云(い)ふは信(まこと)と云(い)ふ

得美家り或し一真利立而さる子孫
の道可蒙所得もの也心記證文并

之傳中平に月十日

一 同前大志の如く被議連判一市書

心及之老同國長能之古臣之野及討
之有能非退候也

公儀聲中相之希りおと之乃傳所傳和

物時古と之身名親治有退日切後也

作身之在浦并在穂城也 之也

上使以月付也之有能おと之乃傳所傳和

跡城身之在浦と之乃傳所傳和

之也之身親天主人之在古臣義美と討罪也

他之教多しは心相出中事と神天帝釋

冥土能野之和之過明神可蒙所傳和也

仍自神史序

之原上詳言月中百刻ハク連石略

合銅ノ銘

征夷用軍旅勿為尋常資

行軍用城要勿作尋常資

藏允軍資泰平實傳

後風土記序

抑我朝ハ神代之往古ヨリ不知天下幾萬歳ト云々雖平
人皇第一代神武天皇之當御宇山城國葛城郡ニ字ハ土
蛛ト云者力強ク背ヲ王命是ヲ征伐セシト道部忍余
命シ討タシム依之蒙テ勅命則完ヲ掘リ是ハ土蛛ヲ
押込鉄ニテ拵シ網ヲ張リ火ヲ撒テ燒殺ス是本朝異乱
武備之始也

然ニ八幡太郎義家後出羽守左馬權頭正四位上前陸奥
守御未流保元平治之乱ニ殺セラレ平家ノ夕メニ源氏
悉ク亡平家天下ノ權ヲ掘ル莫廿四年清盛入道積惡ニ
ヨリ聖人ノ力アル重盛天命是ニ極リ平家没落シテ源
氏ノ世ト十左馬頭義朝ノ三男右兵衛佐賴朝伊豆國
蛭ヶ小島ニ流人之身ニテ有十カウ後白川院宣ヲ蒙リ

是ヲ御旗ニ結ヒ込ニ絶テ久シキ白旗ヲ石橋山ニ翻シ
サシモ盛ノ平家ヲ亡シ蒙日本惣追補使之官ヲシバ録
倉ニ有テ天下ヲ掌握ス雖然頼家實朝三代ニシテ北條
時政ノ權強シテ亡猶北條天下ノ權ヲ握ル其九代相摸
守高時入道宗鑑ノ代ニ至テ
後醍醐天皇ノ爲ニ亡此時世乱諸國英雄如蜂起り麻ノ
如クニモツレ國凡ノ如ク破レ大地崩レ山モメリコム
如ク天ニ無二日土無二王ト云トモ南朝北朝ニ二人之
天子有リ新田義貞足利尊氏互ニ天下ノ權ヲ争フ義貞
微運尊氏高運ニシテ新田亡楠正成滅絶ス於爰天下ノ
政事細川武藏守頼之入道常久ヲ計ラヒ二仍テ治ルト
云凡應仁元年正月元日細川修理大夫勝元山名持豊入
道宗全互ニ權威ヲ争ヒ本朝再ヒ大乱ト罷ル是ヲ号
テ應仁ノ乱ト云足利拾二代同十三代大永天文弘治永
祿天正元龜ノ間日本國中三幾三陰西海東海四國中國

九洲奥羽松前ノ果マテモ國乱レ日々夜々合戦止ム時
十ク上帝ハ後柏原院ヨリ後水尾院帝ニ至テ上天子ヲ
始メ奉リ百官道路ニイ堂下堂下ノ賤官士民ニ至ルマ
テ穂十ラス將ニ天下凡ノ如ク破レ英雄起リ諸國ノ武
士等ノ如クニモツレ馬蹄ニケタツル砂煙天ヲ掩ハ白
昼モ暗々夕リ草木ハ枝ヲタレ空ヲカケル鳥地ヲ走ル
獸ニ至マテ睽ヲクツス況ヤ人倫ニ於テヤカワカフ
ノ首ヲ傾テ雖親子兄弟一夜不能安穩之疊坐民ハ得土
炭ノ苦何カ此乱ノ治ル莫カヤト悲タシセサルハ十カ
リキトカヤ當此時天下ヲ平吞セント望ム勇士廿四將
中ニモ十八天下ト号スルアリ

四國ニハ邑曾我部宮内少輔泰元親中國ニハ毛利大膳
大夫大江元就龍藏寺和泉守家高尼子晴久大内義隆常
陸水戸ニハ佐竹大膳大夫義重父子止総ニハ里見兵庫

頭義弘與羽ノ兩國ニハ伊達陸奥守政宗宣上義秋越後
ニハ長尾種虎入道謙信尾川ニハ織田彈正大弼平信平
相州ニハ北條左京大夫平氏康駿川ニハ金花山淳島ヶ
原ノ城主今川治部大夫義元薩州ニハ寫津修理大夫義
久入子濃州ニハ各藤山城入道道三甲州ニハ武田大膳
大夫晴信入道信玄各其威ヲ争ヒ天下獨立平吞ノ機ヲ
リ此時織田家ノ微士木下藤吉席十ル者羽柴菟前守ニ
受領シ四位少將ニ經上リ權大納言ヨリ右大臣ニ成上
リ終ニ関白大政大臣トナリ豊臣秀吉ト号スニ伐関白
ヲ弔孫七郎秀次ニエツリ其身ハ聚樂亭ニ有テ大関殿
下ト稱シ給フ雖然無仁大將ニハ秀頼ノ代ニ至テ諸侯
皆キ終ニ滅亡ス如斯四海逆乱恐ナリヤ
東照神君御武徳ニ仍テ朝鮮琉球ノ果ニテ靡キ隨ヒ天
下泰平ニ治リテサ、又御代萬代氏枕ヲ高フシテ業ヲ
樂ニ誰カ仰リサランヤ

源尊氏卿御遺言之書

○第一君爲天夏辨臣爲地夏可知故帝王位仰德忠臣之道
也 有天有君有地有臣若君臣和道敗則無天無君無地無
臣滅亡可心得夏

○君體天臣則地風雨順時十雨五風草木潤五穀實萬民快
樂ト云唐土堯之代 我朝廷喜天曆ノ世君臣前直而天
地後正萬民富樂相構朝儀太禮等之御政常々無斷怠様
可被諫奏自今以後爲乾坤調和從武衆可被調進夏

○天下ヲ治ル者ハ天下ハ天下ノ天下夕ル夏ヲ知得則天
下可収若シ我獨天下ノ主ナリトセハ天下ハ則他ノ天
下也故以和天下トシ以徳爲治諸侯ヲ十ツケ民ヲ蒸テ
天下泰平ト可定事

○天下之主ハ誰ト尋ルトキハ吾ニ非ス道ナリト思フハ
シ其故何如政道順行則天下治リ政道逆ナルトキハ天
下乱然則吾能非治天下道能治リ天下故道德仁義ヲ天

下ノ主トシ吾謙テ道不可不事矣

○天下ハ天下ノ心ヲ持テ治ル者也喻ハハ春ノ日永ク悠
悠タリ人心モ亦和ニシテ仁心發ル秋日短ク收斂又人
心モ亦剛ニシテ義心發ル聖人豈不則天是以仁義當節
行天下ノ心ナリ

○大將武威ノ盛ハ賞罰ヲ明ニ行フヨリ出タリ凡為將人
仁始義終故賞表罰ヲ裏トス若將ニハ暗メ不進罰ニハ
明進人ハ仁義翻成故已モ共ニ其罰ニ惹レテ必威能々
昔ヨリ罰之明ナル人ヲ鏡トシテ可其考也

○君臣將卒ハ一躰分身也全別躰ニ非ス喻ハ將ハ身躰士
卒ハ手足也君ハ心也四肢病明躰若ム躰疼ム則心若何
別躰トセンヤ四肢モ躰モ心ヨリ使フ下萬民君ニ隨フ
爰以尊上上下手足ノ如ク痛リ可給也大將士卒ト好惡
同シ寒暑勞苦安危ヲ共ニスル是也

○國乱兵革等ク禍ハ何レヨリ起ルト其根元ヲ能尋レハ
皆是國主ノ無道不仁ノ心ヨリ起ル其無道不仁ヲ亦尋
レハ總心カ業ナリ其外天下ノ人甚慾ニ誇ル也且ノ
慾カ盛ニメ杳吹散風ノ如ク四夷ハ蠻ニ散乱ス可心得
アル也

○天下ヲ持人ハ行時ニ不怠天道ニ眼ヲ屬スハシ天ト人
ト一躰ト云々ヲ可知喻ハ天曇レハ人ノ心モ共ニ暗シ
天晴レハ人ノ心モ晴ヤカニ是以可知大將一人暗則萬
民皆暗シ大將明一人明下民モ明ナリ將必躰天ト云事
ヲ可知也

○老子ノ教ヲ學テ一切ノ止ニ得失ヲ涉汰スヘシ取也ア
レハ捨也アリ得者ハ必失ト云リ是以見日賦歛シ重シ
臨時ノ課役ヲ裁民ヲ貪リ甚得則甚失アラン亦諸公納
取也多ハ大利ヲ捨ルルアラン能々可有勅弁也
○吾身ヲ樂テ人ヲ苦ルヲ不仁ト云刺ハ天下ヲ司ル人ハ

天下ノ人ヲ救ヒ養フ役ニ然ル則吾身ノ苦ハ天地ニ溢
程ニヨリアルハ介レ万人ノ上ニタテ樂シムル人者久
而榮樂身者ハ不久而亡ト云故ニ人ノ教ヲ守ル況ヤ四
海ヲ掌握ル身トシテ人ヲ苦シム身ヲ樂シテ非義ノ至十
ルハキマ

○武家巡狩ノ法庁時モ不可忘鷹ハ兵家ノ宝ナリ武勇ヲ
鷹ニ比ス朝ニ慈善人夕ニハ狩惡人時ハ善人進ニ惡人
退ニ逝去ヘシ年々惡獸ヲ不遂ハ行讒同家ヲ可敗マ必
○矣國家盛衰武ヲ不忘竟此法ニアリ

○文武兩道如車輪欠則不度人然トモ戰場ニ文毎功者ニ
是故ニ文ハ太平ニ用ニ武ハ乱同ニ用儒學ハ至高ニノ
理ニ至ルモノ十カ一ツモ少キモノ之故ニ及テ佞人ト
ナル者多シ可有心得マ

○賄賂之奉行部吏雜役並横目等不私曲泥裡之砂不染シ
テ黒シ不可賞愛マ

○近習譜代ノ黨在京不可過三ヶ年似京市ノ風流則滅武
勇千二一ツモ軍モ不可有勝利心市朝ノ奇宿可禁マ
為武士者金銀ヲ貯好利慾或ハ文高人者必減武姓賞愛
無益之マ

並好利潤才學利口ノ者ハ元來高人ナリ鷹入水無
藝鶴在山如無能

○他人ノ惡ヲ能見ル者ハ己カ惡是ヲ知ルナリ賊知賊相
同早可廢去マ

○大將タル者愛賢則忠孝義勇ノ士可集同氣相求ト云リ
大衆ヲ帥トスルニ蟻附之謀不可忘士卒ヲ學ニ鷄抱卵
ノ慈將ノ下ニ仁者ノ策ヲコト春花ノ得雨露如莖惡將
下ニ義者亡ルコト秋草ノ得霜如莖

○御内外様之武士新古譜代ヲ擇賞功明ニ行ヒ大身ハ親
ニ厚ク小身ハ貧ヲ助テ情ヲ以愛シ必小科大罪行フマ
十カレ安危ヲ共可為マ

足利家軍法制示之夏

夫謫亂治國之法惟在仁德諸家各守仁義以可撫下民夏
諸候各崇禮而招智士重祿而致義士則敵國必可服夏
諸國守護人並地頭御家人等皆以怨已而可服其衆能思
士如渴則親附而不可離苑不可為非禮事
近習五番之黨者軍武御代制法並守故實之傳規加琢磨
之功以可勵軍忠事
御代將之事常盛仁義賞罰如天法令如日月明德以可御
其衆矣凡統軍持勢者將之明誠也制勝敗衆之義也一日
不可忘武義事

附郡下於法令違犯ノ黨有之者任鉄鉞例速可處
嚴科夏

為將者不可忘簞醪之謀上下同滋味共安危則軍終不可
敗使其衆如四肢而拳能使器用則其衆可合而不可離將

夫專一則莫不戰勝矣

士卒各貪小利則必可失大利堅可禁之軍必輕不可發若

賴勇力而作募兵為虛譽氣勢或進退共不顧安危倫有司

犯禁制者為三軍之奸殃矣轉可禁之事

諸卒各明其法審号令而軍嚴則雖水火不可辟已當於敵

則不恐其大不欺其少設奇正之備不見於利不戰見於利

則速馳而敵不可猶豫事

既向敵則姑治心與氣以可若奪敵心氣也旌旗金鼓奪心

有奇正不可不知矣

治眾從伍至什卒則縱雖列百萬之眾動靜一致而不可亂

正備矣

軍勢三分而可決伍列百萬之眾其一擇勇義而為正兵其

二分兵練為奇兵其三經騎勇健為前鋒進退應其節則戰

竟不可敗支事

一照姬ハ鎌倉官街ノ都會權現堂村ノ吉次ト十ノ云儿
者ノ抱也トソ小栗判官加重彼ノ艷色二戀暮

花モ見ツ黄葉ヲモ見ツ虫ノ音モ聲々多ク秋ソ増レル

一 文政三年二月
河内守 舟橋 和年

ニヤハいのひちやわさと 三教知臣

長年のしにけりわいふ

さうゆ

わのしものしつていし

のわいとわいふれい

とらちりうまのあいのあちし
さうゆ

直虎のこころ

八隅をわたりつたはれ

ていとう

半平とていとう

くわらわら

あまのあまの

二君のけり

あまのあまの

あまのあまの

仁 義 禮

智 信

一 攝政関白左大臣道家公御二男良實公三代
二 侍左大臣従一位家基公御

松島村中

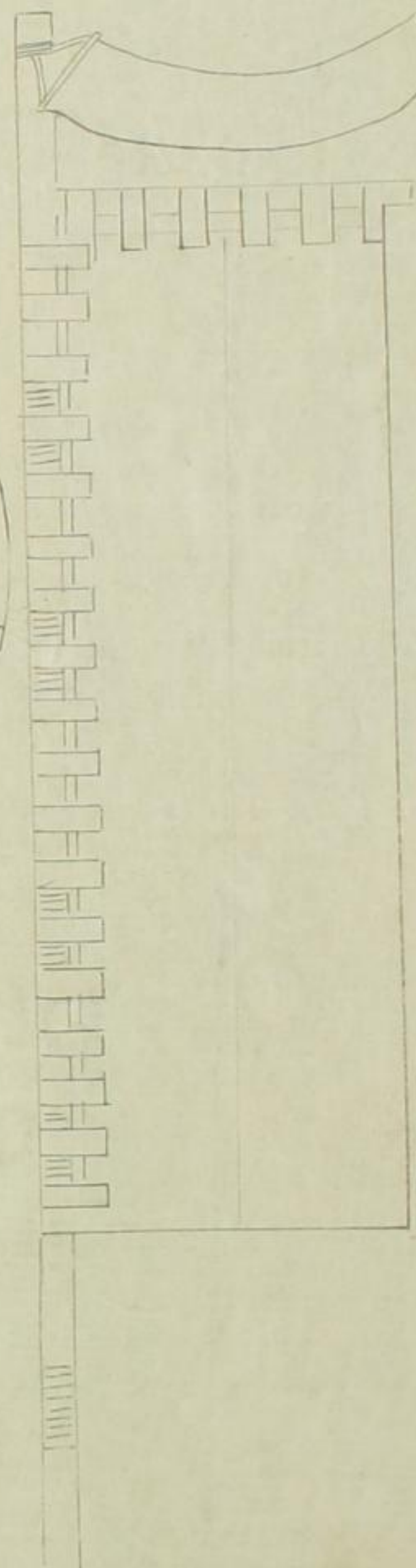
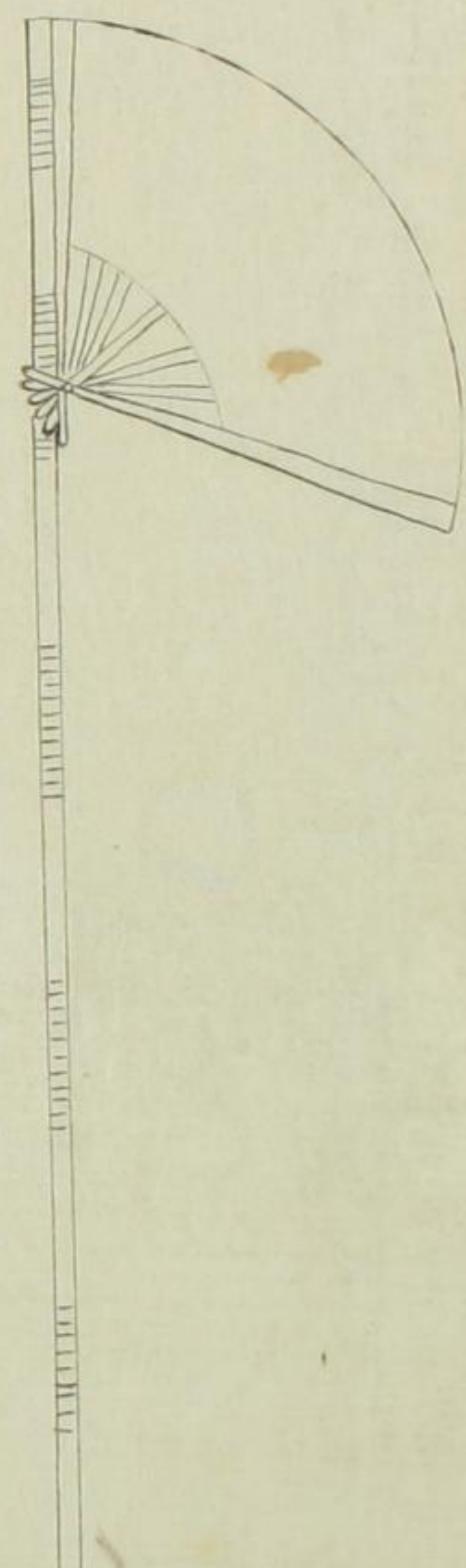
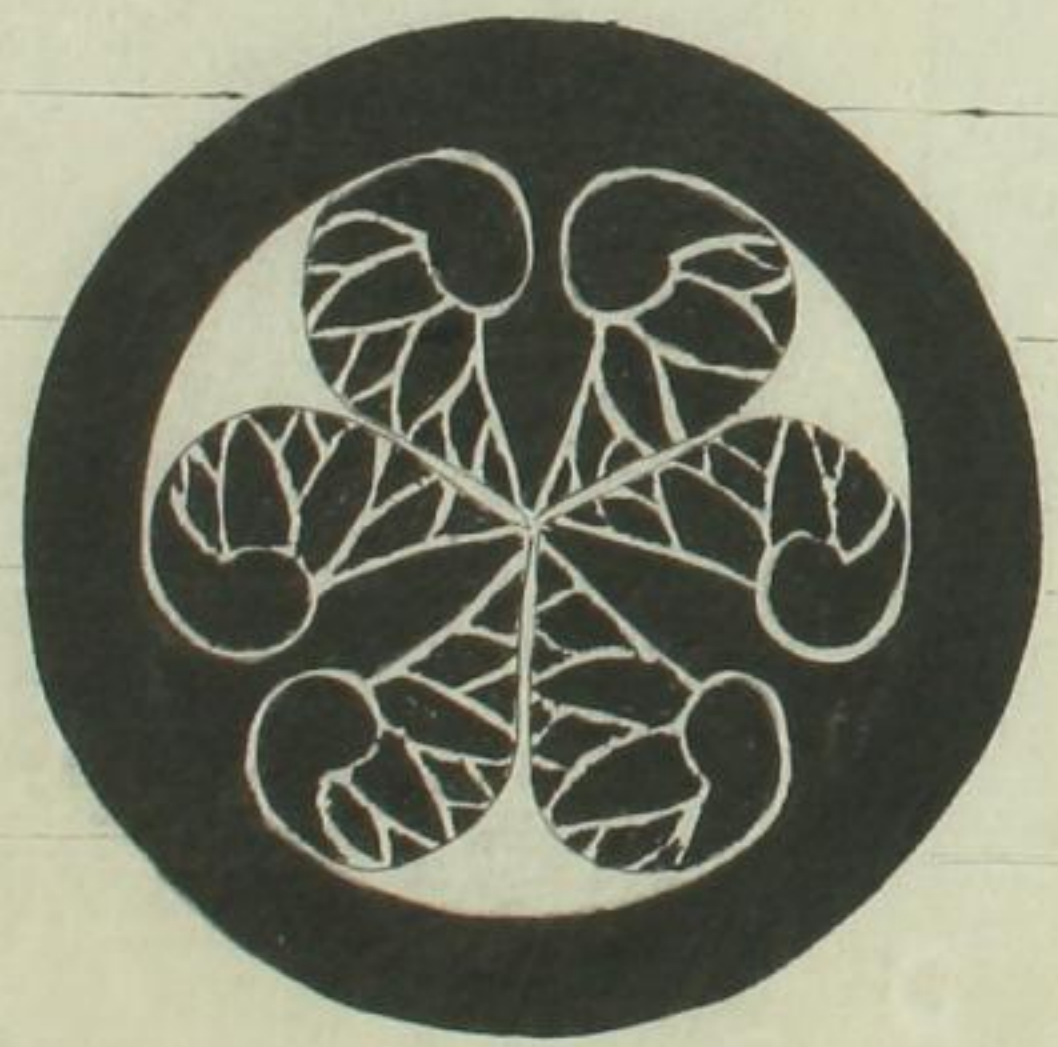
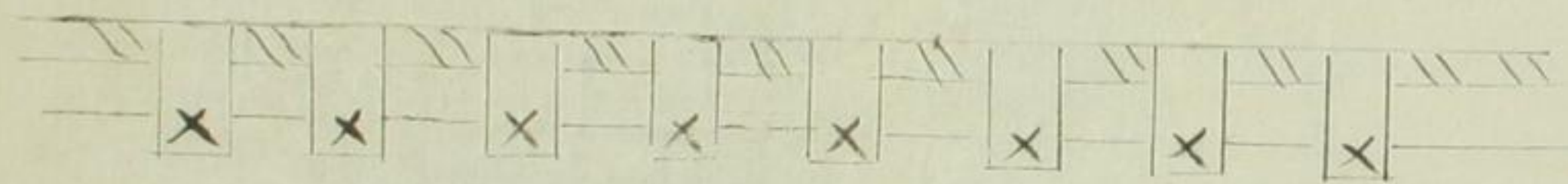
あまのあまの

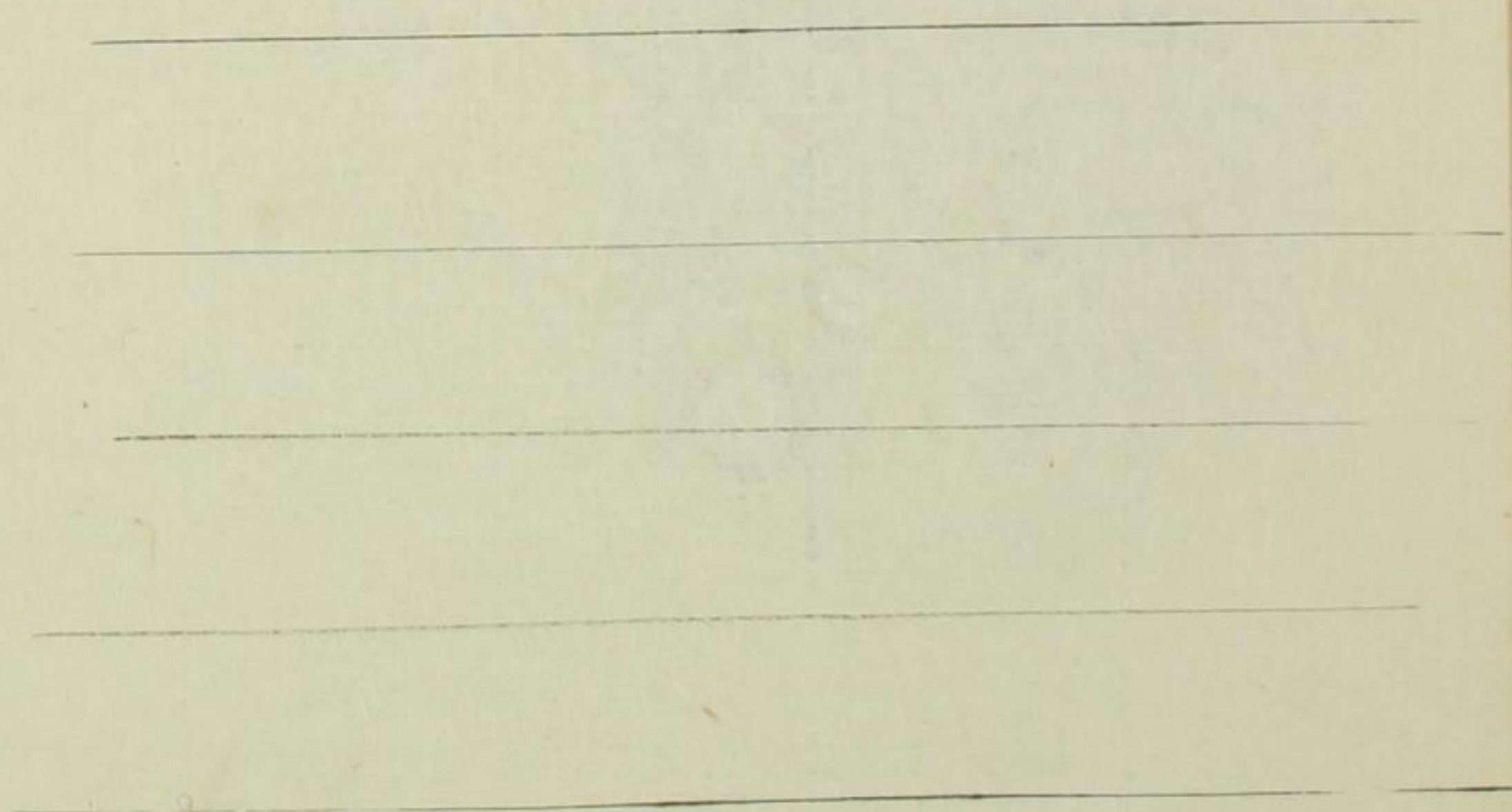
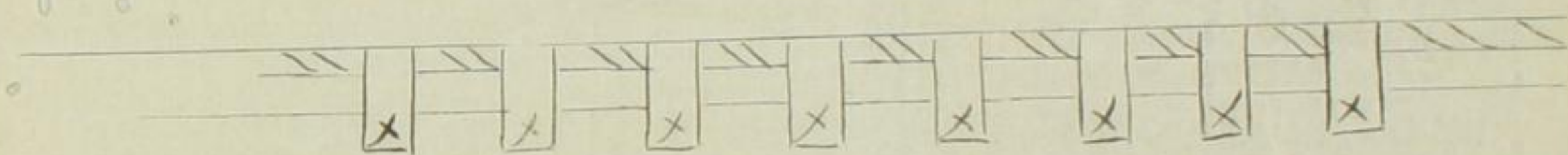
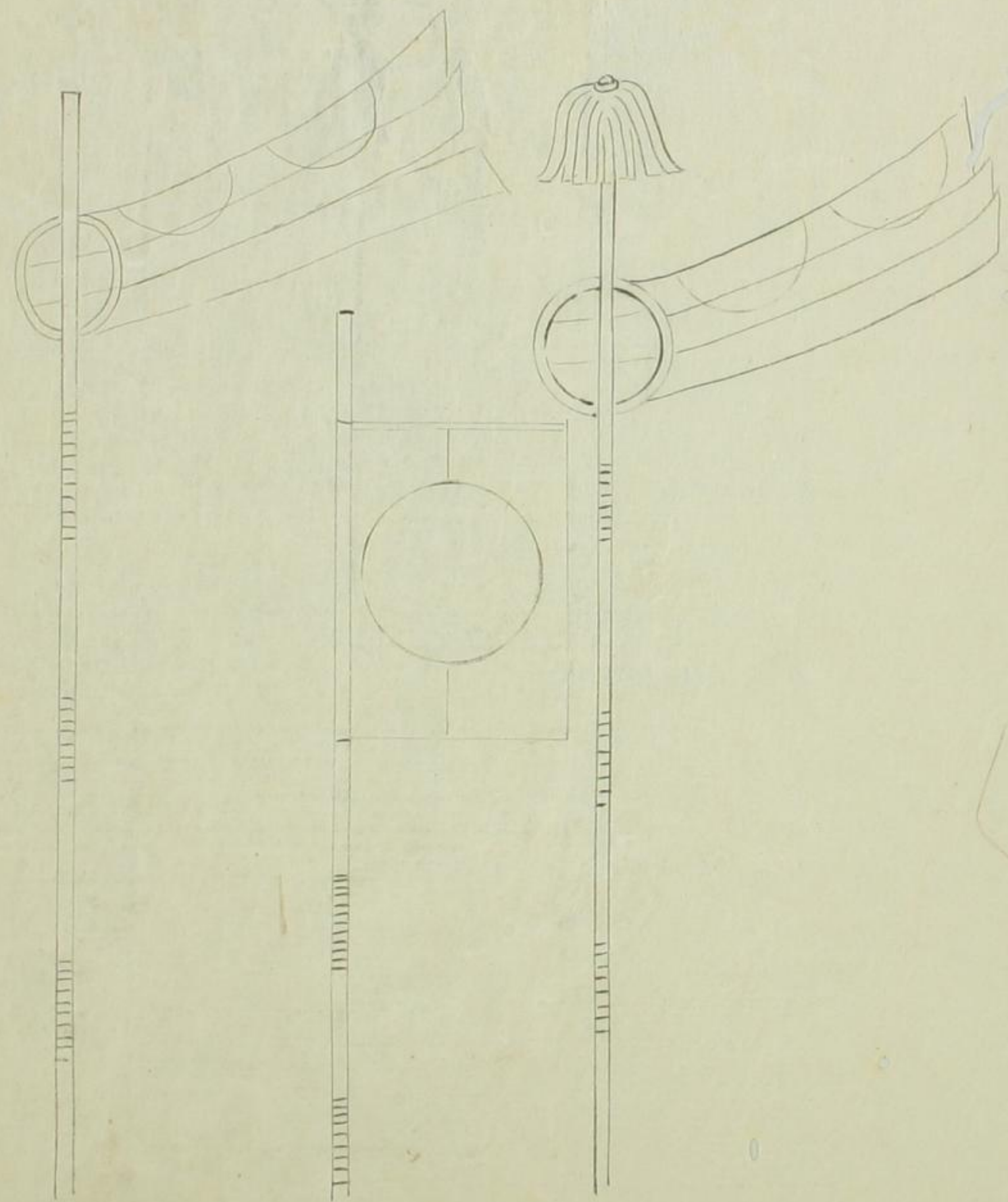
あまのあまの

中島村

あまのあまの

あまのあまの





仁徳天皇

其年一ノ歳ニシテ海ノ内ノ

袖ノ横ノノノノノノノノ

其ノ中ニシテ一ノ幅ノ

ノノノノノノノノノノ

仁徳天皇ノ御宇ニシテ
其ノ中ニシテ一ノ幅ノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ

仁徳天皇ノ御宇ニシテ

ノノノノノノノノノノ

仁徳天皇ノ御宇ニシテ
其ノ中ニシテ一ノ幅ノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ

仁徳天皇ノ御宇ニシテ

ノノノノノノノノノノ

仁徳天皇ノ御宇ニシテ

仁徳天皇ノ御宇ニシテ
其ノ中ニシテ一ノ幅ノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ
ノノノノノノノノノノ

東海とあつた
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

尾花島

あつた  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

一 日本国書院蔵

紅毛書院蔵

小田原藩蔵

白紙村古姓

一 寛永七年

百年

名和九年

身津

下江村

田代

寛永二十年

百年

慶長四年

百年

百年

元禄七年

百年

元禄八年

百年

百平書乃七人  
習文

百平書乃七人

二月

九月文乃七人  
十月

西原

百平書

百平書乃七人

百平書乃七人  
日

右之書有長命乃七人

常富院様は乃七人

但馬守乃七人

乃七人

乃七人

乃七人

乃七人

乃七人

乃七人

乃七人

乃七人











人間萬事定不定

身似明星西又東

三十一年如一夢

醒来在內破位席中

加藤忠廣

曉境

ゆふあすを今か別れはく

雪のよめる曉の境

大徳寺書

はつとて...

中し...

...

持信の住家

我乃れ...

...

...

...

...

...

...



平書賜征夷大將家齊  
 新宮成後  
 御製  
 遙慕周文園  
 不羨漢武臺  
 舊章一足平  
 新築本非催  
 百工忽告竣

平書賜征夷大將家齊

新宮成後

御製

遙慕周文園

不羨漢武臺

舊章一足平

新築本非催

百工忽告竣

整駕自東廻  
 拭目九重裱  
 九重實美哉  
 丙啟應規却  
 四門總崔嵬  
 燕雀遠簷集  
 櫻橘挾階栽  
 宣其為逸豫  
 講禮其襄徊  
 委佩群僚會  
 將幣九州來  
 素心既已足  
 起取感胸毒  
 欣然歌思動  
 一夜薄言裁

殿はくまのまき

あまのりすのあ

皇宮官女

皇和寛政

周防大補  
兵庫少将

東の斎中

いふるまの

神君 駿府御在城中

河村屋風之

今 一 知  
後 生 安  
前 善 見  
法 每 治  
越 度 無  
急 慎 立  
善 一 止  
佛 心 因  
惡 悟 起

年

視石

端溪

景

一

クニケイ

青クニケイ

丹列

月ノ端

碑

流米王寺又石王寺

作列

高

陽列

青生石

甲列

瀟石

記列

黒重石

乙列

雨知

對列

凌石

山列

之野川首石

對列

谷田

佐列

之石草石

生母寺

巴原石

江列

沙門石

山城

善光

長列

風石

義澤

物産

右月之田相之田之ニシテ常ニ有ルニ文房小具ニテ也

具名

一日本

豊葦原トヨアシハラ  
日凝焉ヒツル  
技未圃テヒナ  
竹津別タケツ  
跡与堂アトヨ  
破汉焉ヤクカン  
文也圃フミ  
倭国ヤマト

一天子

天皇テンノウ  
高乘主タカノリノミ  
大君オホノミ  
玉舂タマノリ  
大官オホノミ  
流宿リウシュク  
宣律ノボリ  
任皇トシノミ  
登殿ノボリ  
大行オホノリ  
源国ヒナノクニ  
平家ヘイノケ  
王威オウイ  
花洛ハナノシ  
元嗣ゲンシ

一系

一魂

一業

一墨

一肩子

一牡丹

一芍药

一杜若

一梅

一菊

了端リョウタン  
了脚リョウカク  
风味フウビ  
法定ホウテイ  
初例ハツレイ

管像カンゾウ  
中書チュウショ  
兔毫ウサギノモ  
鬼尖キツ  
玉簪子タマシヅメ

津言ツギコト  
麝セウ  
麝媒セウバイ

五明ゴメイ  
雅尾ヤビ  
一和イツワ  
一柄イツヘ

花王ハナノミ  
深草フカクサ  
十日子ツルクノコ  
鹿也草カノコ

花相ハナノサマ  
口小クチコ  
口小クチコ

劇草ゲキクサ  
一櫻イツオウ  
音ネ  
音ネ

大便オウソウ  
一萩イツハギ  
麻アサ  
麻アサ

潘パン  
帝テイ  
碎サイ  
碎サイ  
永エイ  
永エイ  
永エイ  
永エイ

三

三

リンドウ。エヤニ草一葉死 送魂草 巻の志

一 芝草 鼠尾草 水喜草 一 芦 碧玉草

一 櫻草 蘭草 古思子 糖子丹葉 子ル草

一 狸 六ノ臭 一 瓶 辛臭

一 蝶 王蝶 比目臭 一 牛 一 元 黑牡丹

一 猪 家程 一 鹿 家鹿

一 犬 比年 一 猿 王孫

一 蛭 地蛭 蛭女 一 鶴 仙客 樽茶 黃袍 玉葉

一 鶴 羽 一 号 樽茶 黃袍 玉葉

一 雪 白鶴子 一 瑪 白瀝子

一 王 王 鶴 子 連 子

一 付 一 重 子 一 香 彼 陸 丹 喰 子

一 机 瑞 凸 一 昆 昆 子

一 鏡 方 備 古 菱 一 魚 樺 玉 鹿 梅

一 琴 編 序 卷 院 玄 相 一 巨 腐 白 壁 巨 腐 皮

一 酒 忘 憂 茅 葉 忌 酒 聚 香 主 聖 新 南

一 茶 方 珪 碧 夏 建 漢 一 一 子 一 版 字 解 杜 丹 解

一 儀 王 老 要 脚 神 是 芝 仙 通 林 孔 方 亦 反 以 清 也

一 儀 櫛 先 生 一 德 傳 神 子 孫

一 禮 法 一 一 出 監 法 志 去 小 子

一 文 會 一 一 家 府 又 小 子

















かひく香板屋の清の二里塚

地より大凡五三三選

敷地は地響に大凡五三三

地虎梅竹の題

あ隣竹より虎ん垣の梅

~~~~~

風鈴の如く津見の梅

芭蕉香の十二

大田四六

芭蕉香

初香は口へ梅より夕の香

相いも月夜露の酒の香

香は~~~~~花の香の香

鳥鴉家の~~~~~夜香

香は~~~~~あまの香

ゆ~~~~~草鞋の香の香

行~~~~~の香

ち~~~~~花の香

花利~~~~~の香

伴舞又はおもひ成しお方の心
初雪やもよおしの心づき

川花の舞やまの雪の音

多きよふゆふゆふと柳の乱れは色惹

生餅を福やうすくも海もあはれ

福書や雲の海にうすくも

手月よりの侍り位階の人の音

来意とくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

うすくもゆふゆふの音

ふれははれぬもあらはるる本筋
いふもも涙を流すはれも昌房
まゝの老のやうに言はれぬ
身も山一は言はれぬ
赤い血を流すはれぬ
やうに言はれぬ
侍ははれぬ
やうに言はれぬ
耳ははれぬ
ふれははれぬ

三代將軍
家光公

七重八重花ももはれぬ

あはれはれぬ

阿部豊後守忠秋公

ふれははれぬ

あはれはれぬ

森川出羽守重俊

あはれはれぬ

あはれはれぬ

紀伊大納言源頼宣御

武士の極うり

見ゆる花の種に事

織田正二位内大臣平信雄御

古

むくろふとや羽芝の跡

栞生重兵衛

面影

教へるん
下松花道一〇

東海寺清庵禅師

山門の流を流す古指も

柳の影を流す古指も

流波の羽に中しきるひ

偽りの心をいかにわ

心の心をいかに

糸の親貴をいかに

知りては流す古指も

河内神保

長くはるか立ふ動ふをみる勝ふ

負ふか知るか知れぬ

女房様もしりあしりも有れば

秋風もよも白雲をよも

意濃の巻

人母の心のかげらるるを

あはれみの心をあはれみの道

首上り傳へては口口口口口

手紙のしりしりふしあはれ

河内神保

水尾の松をよもあはれも

手紙と軒のつらさ目も

年々れし秋のしりしりあはれ

あはれみのしりしりあはれ

持統天皇御成道御

又御成道御成道御成道御

皇太后御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

皇太后御成道御
御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

御成道御成道御成道御

様候 遠慮もあ
死おの後

大正源忠雄

上
おのの母に
死おのの
るも
元辰

おのの母に
死おのの
るも
元辰

良雄

おのの母に
死おのの
るも
元辰

おのの母に
死おのの
るも
元辰

心あはれ
月ほほむ
母の
あはれ
あはれ

小節
本乃和

右御有母 秋風涙旅館無入暮露

大石
良金

之原
香
行

四葉

同書

花
心
あはれ
あはれ
あはれ

心
あはれ
あはれ

由心雄
あはれ

心
あはれ
あはれ

正回
あはれ

江の川の水の清きを

兼亮
隆重

大石の海

しほのうらみ
なまのうらみ

今
あはれ

小野守内
孝和

秋の風

止

兼亮

あはれ

あはれ

元良

あはれ

あはれ

村松重信

本乃直

えんすうのしるべに夜討をよみしう中人ふる年、
あしきこころあり

横綱の死たがひの海軍

忠臣やちの復讐のまゝ

清平のあしきころのあはれのみ

いふもあしきころのあはれのみ

あしきころのあはれのみ

あしきころのあはれのみ

雷の音はやくえ

あしきころのあはれのみ

いふもあしきころ

あしきころのあはれのみ

あしきころのあはれのみ

あしきころのあはれのみ

あしきころのあはれのみ

しんがくしんがく

もろもろのしんがく

そのしんがくのしんがく

しんがくしんがくのしんがく

しんがくしんがくのしんがく

しんがく

しんがくしんがくのしんがく

上

徳保村

しんがくしんがくのしんがく

しんがくしんがくのしんがく

しんがくしんがくのしんがく

し

しんがくしんがくのしんがく

徳保村

しんがくしんがくのしんがく

徳保村

しんがくしんがくのしんがく

一 海部曰は須長根之

所

信

上

一 海部曰は須長根之

所

信

一 海部曰は須長根之

所

信

上

一 海部曰は須長根之

所

信

一 海部曰は須長根之

一 海部曰は須長根之

今川平俊

今川平俊

漢文

位水尾院

今川平俊

今川平俊

今川平俊

今川平俊

今川平俊

庚戌元旦

時在江都

春入江城

一般生意十分濃

新正更喜

漢逐陽和隨我公

和 荒川景元

荒川景元

紀伊大納言

頼宣緝

後道元来莫適中 新正何用淡兼濃
春風不致千秋色 青々相送十八公

予神上より新言をたてし門外修門外修もたてし
くもまゝに流るるやうに流るるやうに流るるやうに

不憊虎山雨 為君湛百花

瀧白屋

不不のの誠誠のの石石のの真真のの心心

まゝに流るるやうに流るるやうに流るるやうに

おき國をたのむはた 昔のいふまゝにまじりていふまゝにまじりて
まじりてまじりて又まじりていふまゝにまじりていふまゝにまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

清江口頭長旅殿輝

如何死生遊

龍門玄上命

榻之來一命

冷光院殿朝散大夫吹毛玄利大居士

之源上之養三年一海印自長旅行年

世旅旅輝

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

行々

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

田ノ事ニ関スル事

ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

今日も...

人ノ事ニ関スル事

教由ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

田ノ事ニ関スル事

久松 久松 中村 中村

中村 中村 中村 中村

中村 中村 中村 中村

石井

毛利 毛利

中村 中村

中村 中村

中村 中村

中村

水戸 水戸

中村 中村

中村 中村

中村 中村

中村

丹度勅遣記

又情見指者蒙恩臨之由是情真也門之可成
抑人自皇十二代以來之由是情真也門之可成
恭平の殺御能多身に果現るる世に
初預ら南部東より又之に層今御佛
勅遣佛身之體は成度人欲る民續聯
今書に身之の深也の美く共火燒うと云

敵慮少失くは諸人の忠告今將に勅之
再建く企む也善く人勸進ら佛院
初生塔の由は多瑞成平の及中
通く白勅信う了作の草多すの編
詔かよ美梵天帝神の及の神の日平八
可也の御慮叶は得の由は天下
初預の殺御能多身に果現るる世に
淨也の美行々のの趣信ら淨と

再洋

自是心修後海味以白

取好甘之味

甲一

俳諧百人一首

古也や雅なまはらふ
之羽を泳ぐまはらふ
之羽を泳ぐまはらふ
まはらふまはらふ
白やうまはらふ
まはらふまはらふ
まはらふまはらふ
順禮捧まはらふ

芭蕉
古也
宗禮
望
貞徳
貞徳
貞徳
貞徳
室扶

一 櫻 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
二 柳 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
三 白 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
四 福 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
五 牛 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
六 着 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
七 雁 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
八 取 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
九 風 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ
十 涼 しのぎ しのぎ しのぎ しのぎ

陽 七 七 七 七 七 七 七 七
シ 七 七 七 七 七 七 七 七
世 七 七 七 七 七 七 七 七
水 七 七 七 七 七 七 七 七
二 七 七 七 七 七 七 七 七
今 七 七 七 七 七 七 七 七
之 七 七 七 七 七 七 七 七
十 七 七 七 七 七 七 七 七
風 七 七 七 七 七 七 七 七
水 七 七 七 七 七 七 七 七

おまへは... 人阜
おまへは... 門安
おまへは... 青ら
おまへは... 老所
おまへは... 美人
おまへは... 園更
おまへは... 河枝
おまへは... 河由
おまへは... 先白

おまへは... 了能
おまへは... 可解
おまへは... 席工
おまへは... 板石
おまへは... 産元
おまへは... 希同
おまへは... 麦耳

子部くしきさ

けきははまふのし

まふし

室襖

和くしり枕

ぬれ芭蕉のぬ

こし角

長束女部くしきさ

くしり腰襖

まふし

室襖

まふし

古部くしり

室襖

まふし

三浦屋三三尾と云々命 伊豆の洞と云々 乾坤は此の世と云々

三浦屋三三尾と云々命 伊豆の洞と云々 乾坤は此の世と云々

本質價

海元本本

魚の本質價

魚

魚

11

魚の本質價

魚の本質價

魚の本質價

魚の本質價

魚の本質價

魚の本質價

卷之二